

## 有機農業ネットワーク設立の会 記念講演

平成 26 年 3 月 22 日

鳥取ワシントンホテルプラザ

皆様、こんにちは。本日は有機農業ネットワークが見事にこの鳥取県に誕生しました。心からお祝い申し上げたいと思いますし、皆様と一緒に、私ども鳥取県政といたしまして、もご協力申し上げ、ともに素晴らしい農業展開を支えて参りたいと思います。嬉しいのはやはり、東、中、西部を問わず、全県的に有機農業が広がってきたことでもあります。ちょっと前までは有機農業、あるいは特別栽培もそうでもありますけども生産者が少なかったですし、ややもすると「珍しい人だなあ」というように見られがちであったのも事実です。しかし今では、今日この場に集まりの皆様は錚々たるメンバーでいらっしゃるわけですが、色々と活躍をされまして、各所で名前をお聞きする機会も増えています。例えば代表の谷さんの所での稲作、井田さんの所ではアイガモ農法、それからこの後お話があるとのことですが、鳥取ずいせん生産組合の平木さんのところでは、子供達が虫と遊べるようなそういう農業をやろうと。それから販売促進についても店舗を利用されたり、あるいは蓮佛さんのところでは加工食品まで手を広げておられたり、はては大企業、コンビニチェーンのネットワークと手をつながれて、岡野さんの所のように大々的にダイコンを栽培される所が出てきたり、非常に多くの実例が生まれてきました。

これは時代の流れで、やはり東日本大震災以降、だいぶ変わってきたと思います。私も先般、アンテナショップの打ち合わせで東京の方に行ったのですが、(店舗で)東京のご婦人方がお米とかを買って帰られるわけです。「地震があってから鳥取の方向に目が行くようになりました。安全・安心なものがほしい」とおっしゃる。いいか悪いかは別として、地域ブランドのようなものが定着してきています。特に、有機栽培や特別栽培は、子どもたちやお年寄りといった方々にも安心して食べてもらえるというイメージと、ちょうど重なり合っているわけです。皆さんが普通の栽培方法以上に苦勞して苦勞して、作られたものが評価してもらえる時代に入ってきているのだと思います。この契機をとらえて、ぜひ、ネットワークの皆様と一緒に、有機栽培や特別栽培を進めていければと思います。

雄大な自然こそが鳥取のブランドでして、これと農薬を使わなかったり、減農薬といった農業が結びつけば、評価されるものになると思います。鳥取県は畜産、野菜、米、また果実など、バランスの良い農業がなされています。県産の野菜もブランドができてきております。ネギも一時期中国に押されていましたが盛り返しまして、今では本県の柱になってきております。ブロッコリーも輸入物に押されておりましたが、最近は「きらきらみどり」というブランドが出てきました。米もいいニュースがありました。「きぬむすめ」ですが、「きぬむすび」という、ほっぺたにご飯粒をつけまして、いかにもかわいらしいキャラクターもできたりしておりますが、なんと言っても特 A 米です。今まで鳥

取県の農業者、そして一緒に汗を流して取り組んできた行政当局の夢見てきたことであり、鳥取はおいしいお米の産地だというお墨付きをもらったわけです。これは大きいと思います。隣の島根県の仁多米も10年前に特Aを取っていますが、1回だけです。それだけでお米の産地として定着しているわけです。本県の場合はぜひ年数を重ねていきたいと思うわけですが、最近はなかなか栽培がしにくい温暖化の状況になってきて、「コシヒカリ」や「ひとめぼれ」は2割ぐらいの1等米比率に落ちてきています。そういうなかで「きぬむすめ」を進めていくわけですが、新年度はずいぶんと数が増えそうでありまして、25年度の倍近い引き合いがあるそうです。

ブランドを作っていくチャンスにさしかかっていると思います。TPPの交渉が始まったりもしておりますが、そういう中でこそブランド力のある強いアイテムを作っていくかといけないわけです。アメリカやオーストラリアなど大規模な農業では、コストは低いかもしれませんが、農薬などいろいろな問題があります。そういう中でこそ、有機・特別栽培というのは生き残るものになるはずで、現にアメリカやヨーロッパでは、無農薬のものばかりを売るといって、そういうショップすらあります。普段食べているものへの不安感があるわけです。日本に入ってくる輸入品についてもそういうイメージがありますから、こうした農産物と差別化するにあたり（有機農産物が）一つのアイテムになり得る。また、先程申しましたが、消費者ニーズも安全志向がたいへん強くなってきています。特に震災後、そうした消費者層が増えています。だからこそ安全志向にも合致するわけです。

新年度に向けては農政が大転換を迎えることとなります。先程祝電が来ておりました担い手育成機構が中間となりまして、農地の流動性を興そうと、受け手、借り手を増やそうとしております。また、経営所得安定対策、(10aあたり)1万5千円から7千5百円へと非常に厳しいものが入っているわけですが、これと併せまして飼料米等へ転換しようとしているところです。また、直接支払いについては多面的機能支払いという(10aあたり)3千円のものが入りまして、従来ですと非農家も入れないと協定ができなかったものですが、今後はできるようになります。土地改良連合会などでも、事後仕事、面倒な書類上の仕事を代行しようというような話し合いをしているところです。国がこうして大転換をするわけですが、現場ではたしてうまくいくかどうか、不安もあります。県にもそういう思いがありますが、皆さんと一緒になって乗り越えていく必要があります。これは諸刃の剣でありまして、いいことも悪いことも両方入っていると思います。だからこそ知恵の出どころ、みんなで行動する時期であろうと思います。

有機・特別栽培の取り組みですが、私が就任したH19年と比べますと、倍増しています。1500haを目指そうと動いております。お米では特別栽培の面積比率が全国7位になってきていまして、付加価値を高めようという鳥取県の生産者の思いが数字になって現れ始めています。課題は色々ありますが、一つには究極の有機栽培であるJAS認定の取得。今は鳥取県が登録認定機関になりまして、2万6千円（新規申請）もしくは1万6千円（継続認定）で、場合によっては民間の認定事業者の10分の1程度の料金で認定が受けられます。

技術開発と普及についてですが、防除や除草など、有機・特別栽培ではどうしても難しさ、コストが伴うものです。農業試験場などでも農家の皆さんと一緒に研究を進めてきています。例えば、除草機を田植え後7～10日頃に一度入れたらいいじゃないかと。コスト的にも良さそうだという研究成果が出てきたり、また、水を深めに張るとその後の問題をクリアできるといったりですとか、米ぬかなどの有機物を田植えの時にに入れていく技法など、有機・特別栽培を応援する技術開発が進みつつあります。ネットワークの皆様とも共有していくことができればと思います。

また、販売や販路開拓については、当初から難しい課題がありました。有機と非有機のものを一緒に市場に出すと、価格のうで差別化できなかったわけです。店舗と一緒に展覧するとか、インターネットを活用して販路を開拓するなど、そういうことの応援を県としてもさせて頂いております。また、有機・特裁推進塾（研究会）ですが、これも東、中、西部それぞれ、あるいは全県的なセミナーとして開催したり、県外視察を行ったりとしております。これもぜひ皆様と一緒にさせて頂きたいと思います。

先程の技術開発・普及の中身ですが、水を深めに張るとか、米ぬか散布など、写真で紹介させて頂いております。また、イネミズゾウムシを阻止しようということですが、田植えの後に虫が入れないように囲ってしまうという、単純といえば単純な技法なのですが、こういう技術も普及させようと取り組んでいるところであります。また、雑草を生やさないようにする黒いシートを導入する際に、資材費の3分の1を助成する制度も作らせて頂きました。

もうひとつ、販路開拓についてですが、「アスパル」、「満菜館」、「わったいな」に出したりですとか、あるいは県外への展開も図っておられます。長谷川さんらの取り組みであるこだわり野菜の直営施設や、インターネットを活用した井田さんの例です。また、鳥取ずいせん生産組合の方では、量販店に販売コーナーを作っておられます。県としても支援制度（消費者交流・マッチング支援事業。事業費の2分の1助成）を作らせて頂いております。また、有機栽培等で作ったものを加工して付加価値を高めるといった6次産業化事業にも支援をさせて頂いております。これからの鳥取県のトレンドだと思います。鳥取はフードバレーを目指そうと思っています。食のみやこ鳥取だからこそ、技術と農業者の腕、努力、こういったものが結びついて、素晴らしい商品を市場へと供給していく、そうしたフードマーケット、フードバレーを目指していきたいと考えていまして、新年度の予算にも盛り込み、先週の議会で承認して頂いたところでもあります。蓮佛さんのところの、有機栽培をしたお米やショウガの加工品の写真などが出ていますが、皆様が一步進めて加工される例が増えてきたと思います。6次産業化の支援事業についても、これからも皆様とご相談させて頂ければと思います。

また、これから担い手が問題になるとと思いますが、後継者を育てようとした場合に、夢を持ってやりたいという思いが若い人たちにはあります。実際、これから農業をしたいという方にアンケートを取ってみますと、9割近い方が有機農業に興味があると答えていま

す。また、過半数の人が有機農業の実習をしたいと。これから自分たちが何のために農業をやるかということで情熱を燃やす若い人たちが参入してきます。こうした中で有機農業というのは大きなテーマであるわけです。こういう流れをよく感じて、生産現場の方でも人材育成していかなければならないと感じています。鳥取県では国の政策に輪をかけて、従来から初任給程度の支援をやってきましたが、新年度からは親元に就農される人についても、月々10万円の支援を行う制度を作りました。国の制度に思い切って補完をしながら、有機栽培などへの就農を目指そうとしております。最近、大阪あたりで移住の希望を取ってみますと、農業に関わっていきたいという方は確実に増えてきております。そういう人たちを取り込むためにも、このあたりを充実させていこうとしているわけです。

さらに消費者の方では、有機農産物に関心があると言われる方が3分の2おられますし、また6割近い人たちが有機農産物を購入されるということです。少し前と比べてみても、確実にトレンドは移ってきているわけです。若干プレミアムのお金をいくら払ってでも安心を買いたい、健康を買いたいという人たちが増えてきている表れだと思います。そのようなこともあり、食のみやこ鳥取県をPRしていこうとしているのです。写真は石田純一さんとその奥様、といっても何番目かの奥様で東尾理子さんという方ですが、この2人に梨と牛肉の全権大使をお願いしました。東尾さんはその後、ブログでも鳥取の梨を発信してくださいまして、けっこうファンになっておられます。また、「がぶりこ」というスイカを東尾さんに持って行きましたら「これは私のためのスイカだ。がぶ“りこ”(理子)だ」と大変喜ばれました。そんなつもりでは無かったのですが、このように宣伝して下さっています。また、「きぬむすめ」も先程申しましたように新しいキャラクターができて、販売促進に向かっております。先般、特A米に選ばれた途端に電話が鳴りました。三朝町をはじめとして、関連のあるところへの問い合わせが確実に増えました。現在、中国地方だけではなく、近畿のイズミヤさんのところでも販売していますが、キャラクターの「きぬむすび」を連れてキャンペーンを実施しましたら数時間で完売しました。九州や中四国もターゲットにして販売を広げようとしていますし、さらには首都圏にもPRを打って出てもいいのではないかなと思えるぐらい手応えがあります。従来鳥取のお米を見る目とはだいぶ違うというようにバイヤーさんも見始めているのだと思います。

これから、有機栽培のものを含めて鳥取の農産物をどんどん売っていこうと、アンテナショップを移設することに決まりました。今までは新橋にありましたが、そこは少し小さかったです。そのうえ、隣にスターバックスがありまして。そのスタバの隣から外れて、香川と愛媛のアンテナショップのはず向かい、交差点の反対側に、岡山県さんと共同で陰陽連携のアンテナショップを初めて開設することになりました。今、香川県さんも非常に戦々恐々としていまして、いろいろ戦略を練っているところでもあります。うちも昨シーズンは(ガイナレが)カマタマーレにやられたので、絶対借りは返すというところで、われわれも燃えているわけでもあります。伊原木(いばらぎ)知事という岡山県の知事、ちょっとややこしいですが、この伊原木知事は天満屋の社長をしていましたので、血が騒いで

いるみたいでして、ぜったいにこれを成功させようということでやっております。イベントスペース等を取りまして、あるいはキッチンスタジオ的なところもありますので、ご活用いただければと思います。

「君を理解する友人は、君を創造する」とロマン・ロランが言っているように、夢をかけるのが、これからの有機栽培、特別栽培の農業ではないかと思います。命を守る、あるいは子供たちの未来をつくる、ふるさとを形作る、彩る、そういうひとつの出発点が有機栽培であろうかと思います。皆様のネットワークで鳥取県の農業がもっともっと元気になることをお祈り申し上げ、皆様にとりましてすばらしい収穫のシーズンをむかえられることをお祈り申し上げまして、私からのメッセージといたします。どうもありがとうございました。